

第1宝箱 そらまめ

「ワークショップで考えた施設統合移転

-新施設に導入した設備-

2018年春に福岡県柳川市に完成した「社会福祉法人たからばこ」の新拠点「第1宝箱そらまめ」について報告します。1997年に母体となる市民団体を設立、その2年後には障がい者の一人暮らし支援を開始し、日中の作業所だけでなく、居宅支援や短期入所、放課後デイサービス、グループホームと幅広く、障がい者の生活支援に取り組む法人です。法人初めての新築の施設計画でしたが、掲げる指針「利用者よし、スタッフよし、地域よし」の三方よしに沿う、みんながHAPPYになる建物づくりを目指し、全職員参加によるワークショップ、その後担当責任者による検討委員会を重ねて計画しました。

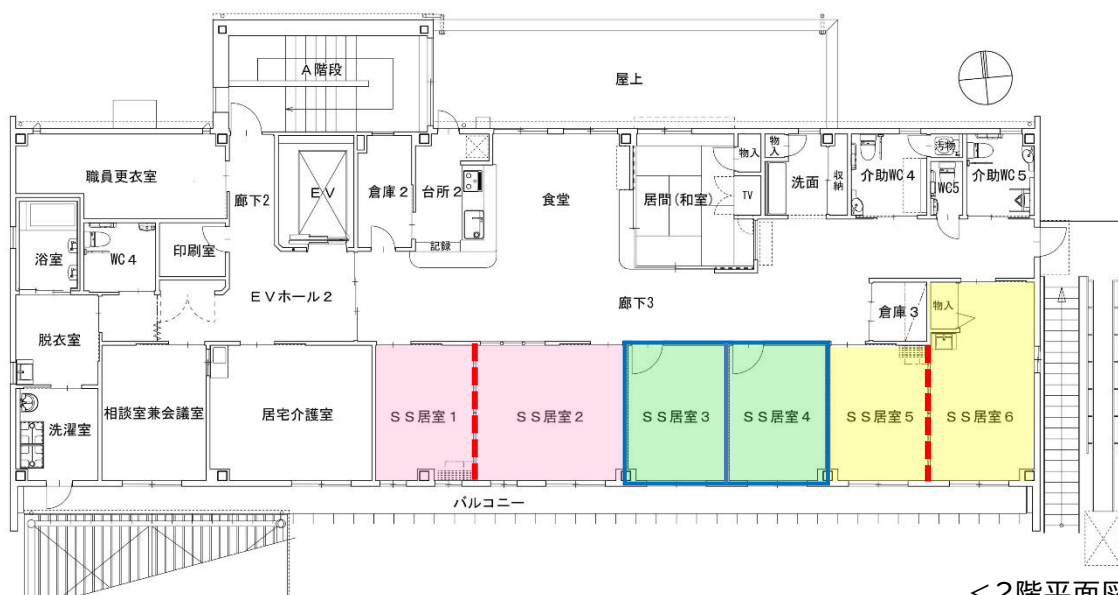
1階は日中20名が過ごす就労支継続援B型と生活介護、2階が定員6名の短期入所、居宅支援(ヘルパー)の拠点になりました。



■様々な利用者に対応する短期入所

行動障がい、重度身体障がい、重度重複障がい、多動性、子ども等、この短期入所で受け入れる利用者は様々です。男女比、車いす利用者、障がいの種類、成人、子ども等、いつも同じ構成とは限らず、グルーピングは日毎に求められます。それに対応するため、可動間仕切り(下図:赤破線)で可変性を備えた6つの居室で構成しています。また、少しでも落ち着いて過ごしてもらえよう、食堂・居間は、対面式LDKとし家庭的な風景を設えるようにしました。

静と動のタイプで場所を分けるとスタッフの状況把握が困難等、課題も多く居室の配置の検討には時間を要しました。環境刺激に敏感な人、音に敏感な人、モノの突起が気になる人に対応できるよう遮音壁で囲み、空調・照明等は隠ぺい型とした部屋(緑色)を設けました。家族と共に利用する場合を想定して洗面と収納を設けた部屋(黄色)。食堂に面して大きな窓を設けた他より広い居室は、子どもが複数滞在の際、集まれる場所にできるよう第2の居間のような使い方を想定しました(桃色)。



<2階平面図>

水の集中管理：



テレビの埋込み：



キッチンの手元を隠す：



水に執着がある人に対して、水の出る部屋を施錠し制限するのは、納得させることが難しく、より気が高まってしまうため、蛇口をひねっても出ないことで納得させる。対応している職員が、他のスタッフに合図を送り、集中管理を制御し水を止める。止めている作業を見られないよう、職員のバックヤードに設けました。集中管理場所までの配管がさらに必要になりますが、このシステムにしてよかったとのことでした。同様にキッチンの水栓も見えらると、カウンターを乗り越える衝動が起きる人もいるため、キッチン前の立ち上がりを高くし、手元(水栓)を隠しました。キッチン内部で座って作業をしていて、立ち上がりで見通せないときは、モニターで確認できるようにしています。

■トイレ、浴室の仕様は最後まで検討

最後まで検討が続いたのは、トイレと浴室です。トイレはどこに配置するのがよいのか、数、どういうタイプがよいのか。トイレの滞在時間が長くなる人もいるため、将来の利用者もイメージして検討を重ねました。また浴室は、充てられる面積、様々な入浴方法を検討した結果、1階日中の生活介護、2階短期入所で兼用することを前提に、身体状況に合わせて選択できるように3タイプの入浴設備としました。

機械浴槽（1階）：



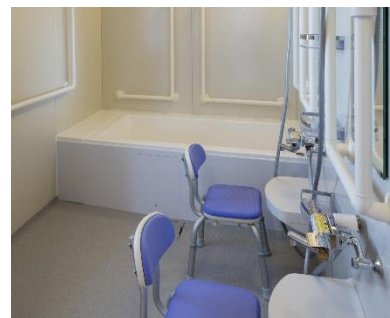
主に全介助者用。介護者の負担減。現在入浴サービス利用増。

埋込浴槽（1階）：



床を這っての移動や杖歩行可能な一部介助者用。

一般浴槽（2階）：



歩行可能な一部介助者。横並びで子どもの入浴指導もできる。

■薪ボイラーの導入で生まれたもの

建物の外部に設置した薪ボイラーは、薪を燃やして水槽内の水を温める給湯設備で、1階の給湯と冬の暖房(温水ルームヒーター)を担います。薪の補充作業は利用者の仕事の一つです。薪の調達については、当初は遠く離れた山間部を想定していましたが、地域の方が剪定した際に出たものを提供して下さる等、薪を通じて地域とのつながりも生まれました。また、開所後、出光美術館の助成を受け、非常用発電機も設置し、停電時でも薪ボイラーを稼働し、給湯・暖房を供給できる体制が整いました。大規模災害時に障がい者を受け入れる「福祉避難施設」の協定を柳川市と結んでいます。

